新聴解教材の編纂にあたって

中村　春次　　岡田　　妙　　宇田　佳正

(1)　聴解教材のあり方

「英語は読めますが，話せません。」これは外国人に何か質問されて当惑した場合に多くの日本人が唱える経文である。彼らがこの言葉を口にするとき，本当にそう思っているのであろうか。そうであるとすれば，よほどおめでたい人たちである。実際は，読めないし，話せないのである。

エドウィン・O・ライシャワー氏は「日本人論――舌のもつれた巨漢」(『文芸春秋』昭和五十四年新年号）の冒頭の部分で次のように述べている。

> だが，日本人の外国語教育は貧寒の一語につきる。ほとんどの日本人が学校で英語を学んだにもかかわらず，十分な速度と正確さで英語を読める日本人の数はかぎられており，大部分は，暗号解読のごとき難行苦行の域を出ていない。日本人ならだれでも，日本語化した英語の五百や六百は知っているが，発音が日本語的にデフォルメされているために，外国人にはほとんど諒解不能なばかりか，英語を母国語とする外国人の口から発せられた場合，それを理解できる日本人は少ない。

読解力がまだ「暗号解読」の域を出ていない上に，生きた英語をまともに聴く機会をほとんど持ったことのない学生を対象にする場合，聴解教材はどのようなものが適切だろうか。

筆者の知るかぎり，これまでの聴解教材には，学生に知的刺激を与えるような情報が著しく欠如していた。いくら英語力が弱いからといって，大学生に，お伽噺であるとか，『イデオロギーとしての英会話』の著者ラミス氏（晶文社，1976年）が述べているようにアメリカ人の生活の断片――ドラッグ・ストアーでアイスクリームを食ったり，ソフト・ドリンクを飲んでいる，等々――の話を聞かせたりするのは，酷というものである。また意味のまとまりのない音声を聞かせて，わからないと責めたてたところで学習効果が上がるとも思えない。よほど英語が好きでなければまともに努力する気持になれたものではない。英語を母国語とする，同世代の学生が聞いても十分聞くに耐える内容であってはじめて，日本人の学生も真剣に聞く気になれるのではなかろうか。

また，読み物として書かれたものを外人に読んでもらった教材も多いようである。このやり方は根本的に誤っている。易しい英語で書かれていても，読み物として書かれたものは，決して聞き易いものではない。そこには話し言葉としての自然さがない。自分の言いたいことを何とか人にわからせようとする情熱や迫力もない。また講演者が成功するには，一つの講演――講義ではない――の中で，言いたいことを二つか，せいぜい三つにとどめるべきだとも言われている。読み物とは自ずと異なるはずである。

そこで今回新らしく聴解教材を編纂するにあたって，まず講演を依頼し，その録音を用いることにした。話題は英語を母国語とする国々に関するものにかぎり，そこの人々が現在直面している主要な問題についてそれぞれの国の出身者に話してもらった。話題の中のあるものは日本自身の問題でもある。またあるものは外国人との接触の上で承知しているべき事柄でもある。具体的には次の四課を企画している。

第一課　The Education System in England（冒頭部分のみ141～148ページに掲載）

第二課　The Women's Rights Movement in the United States

第三課　A Scotsman on Scotland

第四課　Bilingualism in Canada

当然のことながら各講演には，それぞれの講演者の信条やお国の訛りも出ている。それがあってこそ聞き甲斐のあるものになる。

(2) 聴解練習

このように知的水準の高い講演が，はたして日本の学生に英語で理解できるのか，といった疑問がでよう。そこで教材の内容を理解する上で助けになりそうな学習上の手がかりをいくつか準備した。この「手がかり」は学習者が予習に用いるべきものと，教場で使用するものとに分けられる。

「要約」（142ページ参照）は各段落の内容を，できるだけその段落内に現われた単語を用いてまとめたもので，予め読んで理解しておくためのものである。これから聞こうとする事柄の中味が大まかに摑めておれば，教場での緊張が軽減され，理解も深まる。

「語彙」（142～143ページ参照）も前もって学習しておくことが必要である。第一課に関して例を挙げるなら，第三段落の amalgamation などは単語それ自体の意味を知っていなければ内容理解が著しく困難になる。

教場において録音を聞きながら同時に目を使って行う作業に**「単語リスト」**（143～144ページ参照）の確認作業がある。「単語リスト」には第一リストと第二リストがあって，いずれも録音の中で出現する順に名詞，動詞，形容詞，副詞などの主要な単語が列挙してある。第一リストに挙げた単語は第二リストには含まれていない。学習者は第一リストに挙げられた単語を順次聞き取り，確認をしながら各段落を聞く。くり返して同じ段落をもう一度聞く時に第二リストの単語確認をする。これは一見，無意味な単純作業のように見えるが，確認した単語が核となって，その前後のまとまった文脈を把握させるのがねらいである。そのためには単語確認作業の直後に，例えば以下のよう

な質問に答えさせて内容理解を確かめるのがよい。

1. talk: 講演者は何を語ろうとしているのか。
2. change: 何がどれくらい変化したのか。
3. compare: 何と何とを比較しようとしているのか。

このような質問を矢継ぎ早に行って基本的な理解がクラス全体のものになるようにする。

講演の場合は読み物と異なり，講演者が自分の言いたいことを強調したり繰り返し述べたりするため，意外に大意の理解は容易である。とはいっても長い文章の理解は難しい。そこで**「積み上げ文練習」**の方式を案出した(144～146ページ参照)。長文の聴解が難かしい理由はいろいろあるだろうが，一つには，聞いたことを理解し処理して記憶に留めておくことのできる記憶範囲(Memory Span)が余りにも限られているからだ。大多数の学生の場合，記憶範囲は十五単語が限度であると，編者の経験から言えそうである。したがって長い文章は十五単語前後の短文に区切って，たたみかけるように順を追って聞かせ，最後にもとの長い文を聞かせる。長文恐れるに足らず，結局は短い文をどんどん処理するのと大差ない，と暗示的に理解へ持ち込んで行く。積み上げ文練習を実際にクラスで使ってみると，学生の反応が非常によかった。これまでの教材では，はじめから聴解をあきらめている学生が見られたが，積み上げ文練習の導入によって，そのような学生が皆無になった。これは，多少なりとも自分の耳で聞いて理解できる喜びと，さらに聞こうとする意欲によるものであろう。他にこの練習方式の使い方としては，確認のため印刷した積み上げ文を与えて録音を聞かせたり，短文だけは録音と歩調を合わせて音読させることもできる。

単語リストと積み上げ文の作業を終われば，次の**「大意をつかむ設問」**(146ページ参照）は成功率が相当高くなり達成感を与えることができる。

より正確に聞き取らせ，一方で表現力もつけるという観点から，講演中に現れた**「熟語」「表現」「文法要点」**などをいくつか選んで列挙した印刷教材を

加えた。録音を聞くばかりでは疲れる。聞き疲れた頃を見はからって，これらを各自に確めさせるとよい。また文例を音読させるのもよい。録音を聞いた直後は，英語のリズムが耳に残っているためか，意外に流暢に，また喜んで朗読するようである。このように，多角的な学習作業を積み上げれば，**「復習設問」**（148ページ参照）は比較的容易にこなせるはずである。

この他に講演内容に沿った短い会話（146～147ページ参照）を用意した。更に編者と講演者の質疑応答を録音した。いずれも講演内容をより明確に理解させるのに役立つであろう。

(3) 視覚補助教材

録音教材の内容をより円滑に導入し，かつ理解を深めるために二種類の視覚教材を準備した。一つは教材内容を直接視覚化したスライドであり，他方は教材内容に関係の深い映画またはビデオである。

スライドの作成にあたり，編集者は次の諸点に留意した。（1）原則として「絵」で内容を表わすが，場合によっては英語の単語，語句，図表だけのコマも作る。また両者が相補うようなコマも作る。（2）1コマに含む内容事項はできるだけ少くする。（3）主要な事柄はくり返し見せるようにする。（4）コマとコマの間隔はできるだけ均等にする。早いコマ送りはあってもよいが，「間のび」は避ける。コマとコマの間は12秒以下とするよう工夫する。なお，スライドを聴解練習の前の導入として見せるか，練習後の内容確認のために見せるか，あるいは双方で見せるかの選択は自由である。

各課の内容を更に拡大し，深めるために用意した映画とビデオは次の通りである。

第一課 〝What Did You Learn at School Today?〟（映画，カラー，約50分，英国文化センター提供）

第二課 〝American Women on the Move〟（ビデオ，カラー，約30分，

アメリカン・センター提供）

第三課〝A Touch of Scotland〟（映画，カラー，約20分，英国観光庁提供）他二本

第四課〝Cooporation 'Bilingualism'〟（映画，モノクロ，約30分，カナダ大使館提供）

第一課の記録映画は，総合中等学校で学ぶ高校生たちが学校生活を語る姿を中心に，英国の新教育制度を初等，中等の各面にわたって紹介したものである。講演の中で言及されている総合中等学校のグループ学習法式や，新設学科である人文科の内容などが一目瞭然になるであろう。映画の中で，ある総合中等学校の校長が教育観を短く述べている場面があり，それが内容的にも面白く，かつ重要な指摘であると思われるので，予め印刷教材として学習しておくことができるよう配慮してある。

第二課のビデオは，アメリカの女性運動指導者三名にインタビューしながら，女性運動の歴史，実態，未来を紹介したものである。少々難解な内容であるから担当者による解説が必要である。

第三課については英国観光協会の映画を用いて，イングランドとスコットラドを中心に画面で紹介する。

第四課の記録映画はケベック州のある英語系企業で起った使用言語をめぐる労使問題をドキュメンタリー風に扱ったものである。英語を話す会社上層部とフランス語を母国語とする中堅以下の社員との葛藤が生々しく描き出されている。

スライドと同様，映画・ビデオの場合もどの段階でいかに活用するかは授業計画の課題である。

(4)　英語音声解説

英語の音声を文脈から切り離さないで解説する，というのがこの教材の主

な眼目である。そのために，従来のような個々の子音，母音等々の仕組みや特徴の説明から入っていくのでなく，講演録音そのものを部分的に取り出して，音声面の説明を加えていく方式を採用した。

解説の対象としては，各課の講演のなるべく前の方から一定量の文脈を抜き出した。後続部分の理解の鍵になるような個所を選び，音声解説がなるべく内容全体の理解につながるよう配慮した。

話題として取り上げた音声上の事柄は，いずれも教場での経験からみて，学習者に困難を感じさせているものに限った。例えば第一課の話題は，強い音節と弱い音節の存在，その現れ方や機能について，第二課では，音声面から文末や，語句の末尾を捕える方法についてである。これは双方とも話の要点を掴むことと深いかかわりを持っている。

次に解説の手順であるが，練習問題に先立ってまとまった説明をするのでなく，実際に練習作業を課すことによって問題のありかを認識させ，その上で多少の説明を加えてさらに練習作業を積み重ねる，という方式を用いた。クラス全員が同時的に作業をしなければならない点では依然として問題は残るが，練習作業のすぐ後で解説や解答が与えられていれば，少しは練習成果を自ら評価できるのではないかと思う。練習作業は単に音声で反応するだけでなく，下線を引く，丸で囲む，斜線を引く，などの記入方式を取り，自己確認がし易いように工夫した。

音声構造のような，あまりにも基礎的で，大部分が意識の下に埋もれているような事柄は，単に意識的に理解，練習などやっただけでは中々習得できるものではない。だからといって放置しておけば，せっかく上級の語彙，文法能力を持ちながら，基本的な所で足元をすくわれて，結局技能が十分役に立たない。比較的高度な読み書き能力を持ちながら，話された英語はさっぱりダメというのは，意識の層から上の方にばかり力を入れて，意識下に起こるコミュニケーションの仕組みに十分な認識を培わない所にも一因がある。平素は無意識な，しかも歴然と機能している伝達のメカニズムを認識しても

らう，というのが音声解説の目的である。はたしてどの程度それが達成されているか，今後の検討と大方のご批判を要すると思う。

(5)　実験授業

教材が生きるか否かは授業次第である。新教材を教場へ出したらどうなるか，ある程度の見通しを立てたいと考え，各方面のご理解とご協力を得て実験授業に踏み切った。

実験に用いた録音教材の長さを時間で示すと第一表のようになる。

（付A～H参照）

	段落番号	講演録音	積み上げ文練習
(A)	(1)	0′ 15″	――
	(2)	0′ 56″	3′ 40″（1～4番）
	(3)	0′ 36″	――
	(4)	0′ 53″	2′ 15″（5～7番）
	(5)	0′ 42″	2′ 25″（8，9番）
	計	3′ 22″	8′ 20″
(B)	(6)	1′ 11″	3′ 40″（10～13番）
	(7)	1′ 02″	4′ 40″（14～17番）
	計	2′ 13″	8′ 20″
(C)	(8)	1′ 25″	2′ 50″（18，19番）
	(9)	2′ 30″	6′ 05″（20～24番）
	計	3′ 55″	8′ 55″

第一表

この他に録音教材としては「対話（1）」(付G）と「対話（2）」(それぞれ1分45秒と1分20秒）及び発音解説・練習（約12分）がある。

実験授業は三名の編者が各自の考え方で自由にやったが，授業の手順については次の五段階が結果的な共通方式として浮かび上った。

第一段階　語彙説明と要約通読

第二段階　段落毎に内容聴解（単語リストの利用）

第三段階　積み上げ文練習

第四段階　内容理解の確認（大意設問の利用）

第五段階　附随教材（対話，熟語，文法要点，音声解説）の聴解，朗読，解説，練習，及び復習設問

第五週に用いたドキュメンタリー映画は今回はしめくくりとして一回だけ，多少の内容解説の上で映写した。

(6)　学習者の反応と評価

五週間にわたる実験授業を通して学習者がどのようにこの教材に反応したか，また事後の教材評価がどのようなものであったかについて，授業運営の面を中心に述べておきたい。

まず授業中の学習者については作業の総量が従来より増したのではないかと思う。音声教材を聞きながら，目と手を使って次々と作業をこなして行かねばならないし，音声で反復，解答などする量も増した。その意味で授業中は忙がしくなった。しかし必ずしも緊張時間が延びたとは言い切れない。緊張度の高い作業とそうでない作業とを適当に混合して行えるようにすることが教授者側の責務であろう。

同一の話題について同一話者の録音教材を数週にわたって用いることについては一長一短があり得る。総体的には「だんだん馴れて聞けるようになる」感じが強く，その意味で達成感を与えたようである。今週の努力が来週以降で報われるという気持は案外，学習者の好感を呼んだ。

録音教材の一字一句に至るまで詳細に聞き取ることよりも，大まかな内容

や論旨の方を優先した授業の進め方については，学習者は特によいとも悪いとも意志表示をしなかった。何度聞いても細かい点までは聞き取れなくて，それがどうも気になった，という少数意見があった。これについては，単語リストの改善や，また現行のままでも単語リストを利用して，どの単語の直前または直後にそのような気になる箇所が出て来たかを，教授者側が問いただして行くなどの方法で解決できるものと思う。従来のように，書いたものを後で手渡されるまで待っていればよい，という態度よりはその方が望ましい点もあろう。

単語リストによる質疑応答や内容設問への反応の敏速，正確度などから推して，内容把握を中心とした進め方はかなりの説得力を持ったような感触はたしかに残った。また最終講時の復習テストにおいて穴埋めや書き取り問題に対する正答率の高さは非常に印象的で，内容中心に授業を進めれば，副産物的に詳細部分の聞き取りもできるようになるのではないかと推察された。直接，詳細部分を練習対象にして行くよりも，全般的な理解を推進することによって細かい部分が自ずと摑めるようになるのかもしれないと思わせた。このことはいろんな意味でまことに興味深い発見であった。

作業の中で，最大の効果を学習者が自覚したのは積み上げ文練習であった。「音と意味が分離しないような教授法の開発」は JACET の共同研究のテーマにも取り上げられているくらいで(『JACET 通信』第32号，1978年10月，p. 9) 将来ともいろいろな練習方式を考案しなければならないが，その一つの試みとしての積み上げ文練習が好評であったことは幸運であった。多くの学習者が復習のためにも積み上げ文を積極的に利用したことが別表１のアンケート結果から伺える。

授業中に用いた単語リストも相当な効果があった。うまく利用すれば，この比較的単純な練習作業が大きな成果につながると予想される。

しめくくりとして，教材に密接な関係のある記録映画を見せたが，これに対する反応は圧倒的に好意的なものであった。(付表３) 画面を伴った，特に

同年令層以下の登場者の英語については聴解への意欲が非常に旺盛で，将来はこれに応える方策が必要となろう。この興味が，次の課に対する意欲につながって行くように考えるべきである。

限られた授業時数の中で，ほんとうに英語を聞いてわかるようになる学習者はそんなに多くないかもしれない。しかし聴解についての認識を与え，興味を啓発して，機会があればまたやってみようと思わせるところに差し当り教材の目標を据えた。実験授業の受講者の反応から見ると，達成感を与え得た点でまず一歩だけは踏み出した，という感じがする。しかしまだまだ将来への課題が多く残っている。今後の観察と工夫が必要である。

（この原稿は筆者三名の他に本学オーディオルームの牧陽二郎氏が執筆に参加されました。）

（1979年1月）

付

A. Main Lecture

(1) I'm going to talk about the education system, the high school system in England. The system has changed a lot in the last ten years, so first I am going to look at the old system, and then look at the new system, and then perhaps compare them.

(2) Now, under the old high school system, which was set up in 1945, children went to primary school from five to eleven years. Then they took an exam called "the eleven plus" at the age of eleven. This exam divided children; the more able went to grammar school and the less able—if one could say that an exam at eleven years old could divide people into able and

less able—the less able 80% went to secondary modern school. Grammar school usually led to university. Secondary modern schools usually did not lead to university and only very exceptional children in fact went from secondary modern school on to university.

(3) Now under the new system children still go to primary school from five to eleven years old, but there is no exam at eleven and all the children in an area go to a comprehensive school at the age of eleven and they go to the same school; there is no division of schools. Usually comprehensive schools are bigger, an amalgamation of the grammar school and the secondary modern school in an area.

B. Summary

(1) I'm going to talk about the secondary education system in England.

(2) The old school system was set up in 1945. Children took an exam called "the eleven plus" at the age of eleven. According to the result, the more able children went to grammar school, and the less able went to secondary modern school.

(3) Under the new system, after primary school everybody goes to what is called a comprehensive school. Usually a comprehensive school is an amalgamation of the grammar school and the secondary modern school in an area.

C. Vocabulary

(1) education system

compare

(2) the eleven plus
grammar school
secondary modern school
exceptional

(3) primary school
comprehensive school
amalgamation

D. Word List

(1)

talk
high school system
changed
first
old system
compare
going to
the education system
in England
a lot
last ten years
look at
and then
perhaps

(2)

old high school system
1945
five to eleven
the eleven plus
set up
primary school
took an exam
age of eleven

divided
grammar school
an exam
less able 80 %
usually
secondary modern schools
not lead to
exceptional
on to university

the more able
could say
divide people
secondary modern school
led to university
usually
only
in fact
secondary modern school

(3)

new system
primary school
no exam
comprehensive school
the same school
usually
amalgamation
an area

still
from five to eleven
all the children
age of eleven
no division
comprehensive schools
grammar school
secondary modern school

E. Cumulative Drills

1. Now, under the old high school system, which was set up in 1945, children went to primary school from five to eleven years.
   – The old high school system was set up in 1945.
   – Children went to primary school from five to eleven years.
   – Under the old high school system, children went to primary

school from five to eleven years.

Now, under the old high school system, which was set up in 1945, children went to primary school from five to eleven years.

2. Then they took an exam called "the eleven plus" at the age of eleven.
   – They took an exam.
   – They took an exam at the age of eleven.
   – They took an exam called "the eleven plus".
   – They took an exam called "the eleven plus" at the age of eleven.

Then they took an exam called "the eleven plus" at the age of eleven.

3. This exam divided children; the more able went to grammar school and the less able—if one could say that an exam at eleven years old could divide people into able and less able—the less able 80% went to secondary modern school.
   – This exam divided children.
   – The more able went to grammar school.
   – The less able 80% went to secondary modern school.
   – The more able went to grammar school and the less able went to secondary modern school.
   – One could perhaps say that an exam could divide people.
   – One could say that an exam at eleven years old could divide people into able and less able.

This exam divided children; the more able went to grammar school and the less able—if one could say that an exam at eleven years old could divide people into able and less able—the less able 80% went to secondary modern school.

4. Only very exceptional children in fact went from secondary modern school on to university.

– Exceptional children went on to university.

– In fact, only very exceptional children went on to university.

– Only very exceptional children went from secondary modern school on to university.

Only very exceptional children in fact went from secondary modern school on to university.

F．大意をつかむための設問

(1) 1.この講演の話題は何ですか。

(2) 2.イレブン・プラスとは何ですか。

3.1945年に作られた二種の中等学校は何と呼ばれましたか。

4.旧制度ではどのような教育課程を経て大学に進学しましたか。

(3) 5.新しい総合的な中等学校は英語では何と呼ばれますか。

6.新しい中等教育では既存の中等学校はどう変りましたか。

G Dialogue

John is a high school teacher from London now visiting Kyoto. He meets his Japanese friend, Keiko who is also a high school teacher in Kyoto and they talk about the English education system.

Keiko: I understand that the English education system has changed a lot lately.

John: Yes. There is no eleven plus any more. All the children now go

to what is called comprehensive school after primary school.

Keiko: What was the eleven plus?

John: Well, it was an exam designed to divide more able students from less able students. The able students went to grammar school and then on to university.

Keiko: What happened to the less able students?

John: They went to secondary modern school.

Keiko: Did many students go from secondary modern school to university?

John: Very few and only exceptional students. That's why many people thought that the eleven plus was the beginning of the English class system.

Keiko: Now I can see why the system was changed. Under the new system, where do students go from comprehensive school?

John: Some go to six-form college. Those who go to six-form college may go on to university. Other students may go to a technical college.

Keiko: What's technical college like?

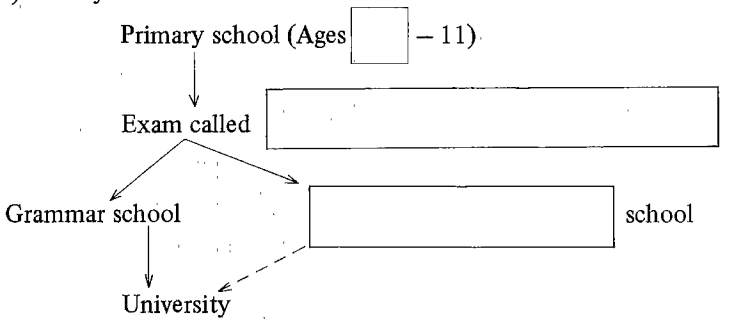
John: Well, in technical college, students usually get vocational training, such as nursing, electric engineering, and the like.

Keiko: Some of our high schools also give similar vocational training.

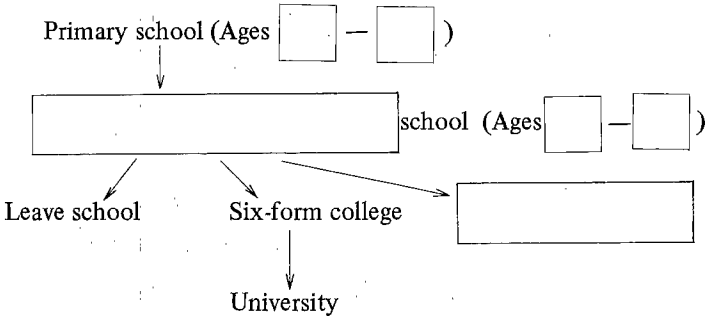
H. Quiz

1. Listen to the recorded passage and fill in the blanks in the diagram.

(a) Old system



(b) New system



2. Listen to the recorded passage and answer the questions:

   i. What age group of children go to primary school both under the old and the new system?

   ii. Which school led to university in the old system, grammar school or secondary modern school?

   iii. In order to enter a comprehensive school, do children have to take the exam called "the eleven plus"?

付表1.　練習法に関するアンケート結果

		非常に役立った	役立った	あまり役立たなかった	使わなかった
予習のために	要約	105	53	7	19
	語彙	57	94	18	15
	熟語	17	58	56	53
	文法	12	37	66	69
	大意設問	28	51	54	51
教室での学習上	要約	66	87	25	6
	語彙	53	91	34	6
	熟語	30	69	58	27
	文法	12	45	84	43
	大意設問	48	82	40	14
	単語リスト	74	63	35	12
	積み上げ文	126	40	15	3
	音声解説	18	59	73	34
	対話	25	92	57	10
	復習設問	33	76	45	30
復習のために	要約	79	73	22	10
	語彙	53	67	49	15
	熟語	39	73	47	25
	文法	36	57	57	34
	大意設問	51	60	38	35
	単語リスト	33	47	58	46
	積み上げ文	113	45	13	13
	対話	33	63	55	33
	復習設問	46	78	30	30

（総数　184名）

付表2. 新教材に対する学習者の感想

（主要点）

	感想内容	人数	%
1.	話された（生まの）英語が理解しやすい	87	36.25
2.	旧教材より授業の流れ（システム）が良い	77	32.08
3.	一つのテーマで四週続くのが良い	43	17.92
4.	内容が良かった	35	14.58
5.	プリント数が多いのが難	17	7.08
6.	旧教材の方が良い	13	5.42
7.	聴解度確認の為 Main Text が欲しい	11	4.58
8.	内容が悪い	11	4.58
9.	一回毎の教材が良い	6	2.50
10.	進度が速すぎる	2	0.83
11.	新システムが一年間続くのは負担だ	2	0.83
12.	Native Speaker と直接話す時間が欲しい	2	0.83
13.	Reading の時間が欲しい	1	0.42

（総数 240名）

付表3. 映画に対する学習者の感想

（主要点）

	感想内容	人数	%
1.	映画を見て理解度が高まった	114	92.68
2.	映画を見ても大した効果はなかった	9	7.32
3.	映画は視覚と聴覚が結びつくので良い	8	6.50
4.	数回見ることが出来れば，より良い	4	3.25

（総数 123名）

Synopsis

On Editing *Views and Issues: Four Lectures for Listening Comprehension*

Haruji Nakamura, Tae Okada and Yoshitada Uda

This textbook has been edited for a two-unit English language course for non-English-major sophomore students. A 90-minute class is held in an audio-visual room once a week, approximately 20 times per academic year. Special emphasis in this course is placed on helping students to improve their English listening-comprehension ability.

Previous course materials at Doshisha University which consisted primarily of collected short stories and anecdotes had been received with a high degree of apathy by the students and it was felt that material such as live lectures would be more stimulating. The editors thought that lectures on topics of current interest might go a long way toward stimulating the students and giving rise to a more positive attitude toward the language. Based on this assumption, the editors adopted the following four taped lectures which had originally been given before the Doshisha faculty and students, and added an introductory 3-minute talk which is to be presented in the first week of instruction:

Introduction	"Why Study English?" Philip Williams, Professor of English Doshisha University
Unit I	"The Education System in England"

	John Hamilton, former Lecturer of English Doshisha University
Unit II	"The Women's Rights Movement in the United States" Louise Crane, the Director of American Center Kyoto
Unit III	"A Scotsman on Scotland" Ian Gow, former visiting scholar to Doshisha University
Unit IV	"Bilingualism in Canada" Anthony Burger, First Secretary Embassy of Canada, Tokyo

The four lectures range from nine to fifteen minutes in length.

In order to help students understand the lectures, the editors prepared various "aids" or practices for each lecture. The main lecture combined with practice materials make up a unit, which is designed to be taught in four to five weeks. Each week prior to class, the students are required (1) to read a *summary* of the lecture and check the meaning of essential words listed on the *vocabulary list*.

In class, the students are given what the editors call *"cumulative drills"* in order to extend their memory span. The editors selected long sentences from the lecture and broken them into shorter sentences which progressively become longer until the length of the original sentence is reached, and had

them taped by native speakers. The students listen to the cumulative drills before and after the main lecture. There is also a *pronunciation guide* in which one of the editors explains in Japanese the characteristics of spoken English. The editors avoided mechanical drills to reinforce the content, relying instead on ***visual aids*** related to the lectures such as film strips, films or video tapes. Additional supplementary material has also been prepared for each unit including (1) a taped *interview* by one or two of the editors to the featured lecturer, (2) *dialogues* between native speakers and Japanese related to the same theme, and (3) a list of recurring *grammatical structures* with explanation in Japanese.

In experimental classes carried out by the editors from October to November 1978, Unit I of the book was tested against 6 classes or some 300 students; an overwhelming majority of the students approved of the experimental teaching material and felt that the course had been beneficial.